

[解説]

2010年国際情報システム会議 (ICIS 2010) の参加報告

杉野 隆

はじめに

2010年12月10日金曜日から15日水曜日正午まで、米国ミズーリ州セントルイスのHyatt Regency St. Louis at the Archで、第31回ICIS 2010が“Information Technology: Gateway to the Future”を統一テーマとして開催された。セントルイスは、ミシシッピ川の河畔に拓かれた都市であり、開拓時代には、河を超えて未知の土地である大西部に向かうゲートウェイであった。1965年に完成したGateway Archは、そのような彼らの功績を称えるために建設されたモニュメント(滞在したホテルのすぐ近くにある)であるが、今回の統一テーマはこのArchに言寄せている。

筆者は12日から14日までこの会議に参加する機会を得たので、本会議の概要、内容、気をついた点、次回の予定などについて報告する。

会議の概要

ICISは、Association for Information Systems (AIS)が主催する情報システム学分野で最大の年次大会である。ICIS 2010の本会議は12月12日に開催された。参加登録者は1,196名(公表された12月2日現在の参加者リストによる)、発表論文数はパネルも含めて269本となり、盛会であった。上位5カ国には、米国(707名)、カナダ(66名)、ドイツ(59名)、オーストラリア(43名)、香港(33名)が連ねていた。日本からは7名(所属機関が日

本に存在する者)の参加があった。昨年¹に引き続き、北朝鮮からも1名(昨年とは別人)が参加していた。

1日目は、8時30分から10時迄のKeynote Session, 30分間のCoffee Breakがあった後、10時30分から通常の分科会(一般発表sessionやpanel)が開かれた。午後は2時から1時間30分の分科会, 30分間のcoffee break, 1時間30分の分科会と続いた。2日目以降も同様であるが、筆者は個人的都合で3日目早朝に帰国の途に就いた。

会議の進め方と規模

8つのtrackが同時に開催され、一連のsessionはそれぞれ90分単位で開催された。各sessionには3本の発表が割り当てられ、研究者による発表が行われる。その他、出版社やベンダなどのスポンサによるexhibitsも同時に開催された。ISに関する近著(洋書)を直接見られることは都合が良い。ICISで発表される論文は、Completed Research Paper (CRP), Research-in-Progress (RIP), Teaching case, Panelに分類されるが、今回は、sessionでの発表はCRPに限られ、RIPはすべてPoster Sessionに回された。これまでは、RIPも一般のsessionで発表されていた。また、これまでの大会では、各発表にはdiscussantによるコメントが付いていたが、今回はこれもなかった。ICISの評判が高まるにつれて、発表件数が増加してきたが、track数を増やすと参加者がいろいろな発表を聞けなくなること、一方で、発表に対する質疑の時間を十分に確保したいと

Takashi Sugino

国土館大学

[解説] 2011年2月14日受付

© 情報システム学会

¹ ISSJ 論文誌 Vol 5, No 2 に佐藤さんの報告がある。

いうプログラム委員会の意向が働いたようだ。Poster Sessionは月曜日の食事時間 12 時～1 時 30 分に設定された²ため、発表者も一般の参加者も、Lunch Boxのパンを頬張りながらの議論となった。

例えば、5 年前の Las Vegas 大会（あるいはそれ以前）と比べてみると、発表論文数合計が、74 件から 261 件と 3 倍以上に増加しているが開催期間は変わっていない。そのため、Las Vegas では、RIP と TC の募集を停止している。表 1 のように増加してきている実態を見ると、上記のような措置もやむを得ないことと思っただ。一方で、発表件数を増やし、参加者を増やしたいという開催者側の論理も働いているのか、採択率は大幅に上昇している。査読のレベルを下げているとのうわさも聞こえるが定かではない。discussant はその分野の識者が担当するが、発表そのものに加えて、これも参考になるショート講演だったので、残念ではある。

先述の通り、ICIS は AIS が開催するグローバルな大会であるが、過去 6 回のうち 5 回の大会が北米で開催されている。この頭文字の A を American だと皮肉る英国人もいた。

会議の内容

今回設定された track は図 1 のとおりである。

昨年は Panels を含めて 23 あった track 数を 20 に減らしたことも上述の対策の一環であろう。例えば、2005 年の Track 構成を見る（Subtrack はまとめて示し、Sub の分野名を：以下に記した）と、図 2 のようであった。

IT Services は 2005 年にはなかったテーマである。IT Service Management については従来からあるテーマだが、今回は Service Sciences が追加されている。全体的には、テーマは大きく変わっていないと思われる。

今回の大会では社会に関するテーマを扱った論文が増加していると思ったが、social 又は socio という言葉をタイトルに持つ論文数をみると、2005 年には 82 件中 7 件、2009 年、2010

年には、それぞれ 205 件中 23 件、269 件中 22 件であり、ほぼ同程度の比率であった。いずれにせよ、経営学の側面のみではなく、社会システムへの関心を持続することは、IS の社会的役割からすれば、望ましい傾向であると思う。

次回の予定

今年（2011 年）は、上海で 12 月 4 日から 7 日に上海国際コンベンションセンターを会場にして開催される予定である。日本から近いこともあり、ISSJ 会員の多数の参加をお勧めする。

著者略歴

国士舘大学情報科学センター教授。1969 年東京大学工学部計数工学科を卒業し、同年八幡製鐵（現：新日本製鐵）に入社。情報システム部門に在籍し、製鐵所の原料生産管理システム、本社では経営計画関連システムの開発に従事した。その後、社内ネットワークシステムの企画、開発、運用に従事し、ネットワーク、情報セキュリティ分野に関心を持つに至った。1999 年に新潟国際情報大学、2001 年に現職。1946 年 8 月生まれ、東京都出身。

² 2008 年の Paris 大会でも同様に、RIP は昼食時に開かれた。

表 1 最近の ICIS での論文発表件数の推移

年次	2005	2006	2007	2008	2009	2010
開催地	Las Vegas	Milwaukee	Montreal	Paris	Phoenix	St. Louis
参加者	1,346	1,252	1,382	1,405	1,200	1,196
CRP	74	86	100	159	141	172
RIP	0	32	58	45	57	87
TC	0	6		3	0	2
論文計	74	124	158	207	205	261
PANEL	8	8	8	9	7	8
発表合計	82	132	166	216	205	269
応募総数	605	未発表	不明	817	703	803
CRP 採択率(%)	12.6	未発表	不明	約 25	未発表	29.8

注 筆者は、2007 年には参加していないため、データに一部欠落がある。

1 Gateway to the Future
2 Breakthrough Ideas
3 Economics and Value of Information Systems
4 Engaged Scholarship Through Design and Action
5 Global, International and Cultural Issues in IS
6 Human Behavior and IT
7 Human Capital and Information Systems
8 Human-Computer Interaction
9 IS Curriculum, Education and Teaching Cases
10 IS Philosophy
11 IS Security and Privacy
12 IT Project Management and Outsourcing
13 IT Services
14 Knowledge Management and Business Intelligence
15 Online Community and Group Collaborations
16 Open Source and the Open Collaboration Process
17 Organization Theory, Strategy and IS
18 Research Methods
19 Systems Development and Alternative Methodologies
20 Panels

図 1 ICIS 2010 の Track 構成

1 Alternative Approaches to Information Systems Development
2 Breakthrough Ideas in Information Technology
3 Global Information Technology Management
4 Human-Computer Interaction
5 Knowledge Management
6 Philosophy and Research Methods in Information Systems
7 Security and Assurance
8 Social, Behavioral, and Organizational Aspects of Information Systems
9 Valuing Information Technology Opportunities
10 Web-Based Information Systems and Applications
11 Panels

図 2 ICIS 2005 の Track 構成